



四国の「工場」知っていますか 13

バイオマス 資源化センター みとよ

—香川—

三豊市で4月、民間が運営する「ごみ処理施設」バイオマス資源化センター「みとよ」の稼働が始まった。従来の「燃やして埋める」方式とは違い、微生物を利用して「ごみから燃料をつくる」トンネルコンポスト方式を国内で初めて取り入れた。施設には、煙突はもちろん、焼却炉もない。周囲には強い異臭もない。

施設の奥に進んでいくと、「バイオトンネル」と呼ばれるコンクリート製の発酵槽（幅6m、高さ5m、奥行き35m）6基が整然と並んでいるのが目に入った。

「この一見、何の変哲もないトンネルが技術の塊なんですよ」。運営する「エコマスター」の鎌倉秀行所長（39）は、にやりと笑う。粉碎機で細かくしたごみと微生物の入った発酵物を混ぜて内部に投入し、17日間置いておく。分解処理は微生物に全てお任せし、酸素濃度や圧力といった内部の環境面もコンピューターが自動制御する。

ごみ燃料化 微生物の力で



その後、発酵熱によって水分が飛んだごみは固形燃料に加工



され、製紙会社で石炭の代わり
に使用される。

三豊市内の家庭などから出る



右下は別の加工工場を経て最終的に製品化された固形燃料。左はごみ処理施設でできる原料

三豊市は2010～11

年、公募や審査を経て

トンネルコンポスト方式を採用して。廃棄物処理を扱う県内の2社が共同出資した「エコマスター」が、約16億円を投じて施設を整備。市の財政負担はなかった。

その代わり、同社は市からごみ1トンあたり24.8円（税別）の処理委託料を受け取る。料金は近隣自治体と同水準か、少し高い程度だという。契約は20年間。今月からごみのみ見学を受け入れる。

三豊市山本町神田30の1

☎0875・23・6230

異物を取り除いた固形燃料の原料。プレス機で塊にする（いずれも三豊市で）

一方で、施設の順調な稼働にはできなかった燃料の販売ルート確保も必要になってくる。鎌倉所長は「せっかく資源になるものを燃やすのはもったいない。資源の少ない日本だからこそ、全国で導入が進んでほしい」と力を込めた。（猪股和也）

可燃ごみは、年間約1万1000トン。そのうち3分の1以上の約3700トンが燃料として再利用される計算だ。二酸化炭素も年間約6500トン削減できるという。トンネル内では強い異臭が発生するが、微生物を利用した脱臭装置「バイオフィルター」により浄化される。

焼却施設では、炉の火を絶やすことができません。常時人手が必要だが、ここではモニターのチェック係や重機の運転手として計6人が必要なだけ。人件費もぐっと抑えられる。稼働以来、全国の自治体から視察の要望が相次ぎ、ごみ処理の新たな代替施設として期待が高まっている。

